

ユダの罪、イエスの祈り

丸山 勉

[聖書] マルコによる福音書 14章 10～11、43～50 節

十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

[序] ユダの謎

先週水曜日夜の祈り会で、今日の聖書箇所について自由に分ち合いました。山下先生、飯塚岳夫さん、阿久津さん、そして私の四人でしたが、そこで、「このイスカリオテのユダの物語は一体どう受け止めたらよいのだろう…」という話し合いになりました。イエス様の受難物語で、避けて通ることが出来ない問題です。

ドラマや小説で「ユダ」という名前が使われる時、それはほぼ「裏切り者」の代名詞です。しかし、聖書のユダに対して、ただ「あれはひどい悪魔的な男だ」と断罪出来ればそれはそれでスッキリするのもかもしれませんが、色々な疑問が出てきます。イエス様は前もってユダの裏切りを見抜いておられたのなら、それを止めることは出来なかったのか。また、ユダを12弟子の一人として選ばれたイエス様は、見る目がなかったのでしょうか。そして、イエス様がこのあと十字架の救いを成し遂げることが神様のみ旨であるならば、ユダはその神様に用いられた人物とさえ言えるのではないかなど、様々な問いが出てきます。

けれど、その祈り会でもそんな話になったのですが、ユダのことを考え始めると、それは自分自身に跳ね返ってきて、この私の中にもユダ的な要素がないとは言えないのではないかと話し合いました。これは信仰を持っているからこそその視点です。

[1]「生まれなかった方が、その者のためによかった」?

新約聖書も、ユダについては筆が重いと云いますか、最小限のことしか書いていません。彼ユダは何故イエス様を引き渡してしまったのでしょうか? 聖書はその理由を明瞭には語りません。ユダはこのあと悲劇的な死(自死)を遂げてしまいました(マタイ 27:3～10)ので、彼の心を確かめることは出来ません。

イエス様は、ユダに対してちょっと驚くような言葉を語っています。14章の過越の食事の場面です。14:18から読んでみます。「一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

どうでしょうか？私たちはこのような激しいイエス様の言葉に戸惑いを覚えます。なぜここまで仰しゃっているのだらうと思います。イエス様から「裏切り」と言う言葉が出てくるのもショックです。けれども私は思ったのですが、これは、イエス様がどれほど深い思いを持って、弟子たちを愛し、信頼していたか、ということの裏返しの言葉なのではないでしょうか？イエス様は「わたしの愛のうちにとどまっていなさい」（ヨハネ 15:9）と仰しゃいました。裏切りとは、その主の愛を足蹴にすること、私にはあなたなどいなくても全く困ることはない、と無視すること。そうであるなら、それは、実はあなたという存在、あなたという命を損なうことなのだよ、と主は悲しみながら仰しゃっているのではないのでしょうか？

[2]なぜ、ユダはイエス様を引き渡したのか。

誰も、自分が愛する者を、好き好んで敵の手に売り渡すことはしません。ユダの真意、これはよくは分かりません。単純に金欲しさから裏切ったとは考えにくいです。彼は弟子たちの会計係まで任されるほどで、また時に、財布を誤魔化すこともあったという記述もあります。頭が切れる人だったと思います。そうであれば銀貨 30 枚欲しさが、愛するイエス様を売り渡す理由にはなりにくいと思います。

解釈の一つに、ユダはイエス様を、ローマ帝国からイスラエルを政治的に解放するメシアとして期待したけれど、その期待と違ったため裏切ったとするものがあります。そうかもしれませんが、確証はありません。或いはこういうことも考えられます。ルカ福音書 22 章の初めには、「ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談を持ちかけた」とあります。ユダは自ら出掛け、相談したのです。この時もしかしたら、祭司長たちから「うまく捕えさせてくれれば、後は悪いようにはしない」などと言われ、そうであれば軟禁されるだけで、かねてから受難の予告を語っていたイエス様を死なせずにする、と思ったのかもしれませんが。しかしその考えは浅はかでした。それで済む筈はないのです。…その後、ユダはイエス様が有罪判決を受けると、途端に後悔し、貰った銀貨を神殿に投げ込み、絶望のうちに首を吊ってしまうのです。（マタイ 27 章）

ヨハネ福音書の 13 章 27 節には、最後の晩餐に時に「サタンが彼の中に入った」という言葉がありますが、本当に彼の心はこの時、正にサタンの力に捕われてしまったとしか言いようがない、自分でも説明がつかない闇に覆われてしまったということが言えるのではないのでしょうか？恐ろしいことです。

そして、ここで私たちが驚くのは、イエス様ご自身の言葉です。今申し上げた ヨハネ福音書の 13 章 27 節では「ユダがパンを受け取ると、サタンが彼の中に入った。そこでイエスは、「しようとしていることを、今すぐしなさい」と彼に言われた」とあるのです。イエス様はユダがこれから行う行為にストップをかけないのです。それどころか、それに続くヨハネ 13 章 31 節以下にはこうあります。

「さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった」。ユダの主を裏切る行為が、神の栄光に繋がっているのです。これは一体どういうことでしょうか？

[3]罪——神を思いのままにしようとする衝動

聖書は主の受難物語の要所要所で、「時が来た」とか、「聖書の言葉が実現するためである」といったイエス様の言葉を記しています。マルコ福音書の 14 章全体を見て頂きたいのですが、イエス様は、このような計略が進む中、ただ神様のご計画に従っているのです。その神様のご計画とは、神の子であるイエス様ご自身が、全ての人の身代わりになって十字架のお苦しみを味わい、死なれることです。

では、ユダの行為はその意味で正当化されるのでしょうか？ 神の栄光が表わされるご計画の道具になったのなら良いと思うのでしょうか？ そんなことはありません。D・ボンヘッフアーというドイツの神学者・牧師はこの時のイエス様の苦しみは とても深いものだったと語ります。こう説教で語りました。

「敵」だけでは、イエスを思いのままにすることはできない。それゆえ、そこに「友」が加わる。最も近い友が、イエスを捨てる。弟子が、イエスを裏切る。もっとも恐ろしいことが起こるのは、外からではなく、内からである。」

イエス様は見抜いておられました。本当に恐ろしいことは、外からやって来るのではなく、この交わりの内側から起こるのだということを。その最たる例がユダでした。しかし、これはユダひとりではないでしょう。ペトロしかり、また 50 節に「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」とあるように、弟子たち全員の問題であります。そして、それはそのまま、私たち一人ひとりの問題であることだと、迫ってきているのではないのでしょうか。

私もバプテスマを受けてから早、今年で 40 年になろうとしています。年を重ねるごとに思わされることは、自分がイエス様に、虚心になって聴こうとしない時、私はイエス様を脇に追いやり、いえ、もっと言うならば、イエス様を排除し、亡き者にしているのではないか、ということです。「自分流」のイエス像のイメージを作り、私がイエス様に聴き従うというより、イエス様を自分の願望に従わせようとしているのではないか、と深く反省させられることがあります。

ボンヘッフアーの言葉を続けると、

「悪魔もまた、みずからの起源が、けがれの無い方のうちに、すなわち神のうちにあることを知るのである。悪を行なう者は善なる者の弟子であろうとする。悪を行なう者は、その方を裏切るまでは、善なる者の情熱的な弟子である。悪を行なう者は、自分が神に奉仕しなければならないということを知っており、また自分のもっていない力を神がもっているということで、神を愛そうとするが、しかしその場合に、彼を支配しているのは、神を思いのままにしようとする衝動なのである。」

——この最後の言葉はとても鋭く、恐いですね。「神を思いのままにしようとする衝動」、それに人間は支配されやすいのだと言っています。

[4] 神様のご計画の前進

ユダの話の箇所から説教の準備をする、というのは正直しんどいことでした。ユダという語には「賛美」という意味があるそうですが、それと裏腹に決して楽しい話ではありませんし、重たい鉛のようなものが心の中に沈殿するのを感じます。

「神様、イエス様を引き渡してしまったユダは赦されることはないのですか？ ペトロと違って、イエス様のもとに戻ることもなく自ら自分に死を与えてしまったユダは、滅んでしまったのですか！？」—そう問わずにはいられません。

そんな中、私はこの 14 章全体を読んで、光を見たような気がしているのです。この 14 章はものすごい章だと思いました。小見出しを並べてみただけでもそれは伝わると思います。(これは殆どマタイ 26 章と同じです)

初めに、「イエスを殺す計略」、「ベタニアで香油を注がれる」、「ユダ、裏切りを企てる」、「過越の食事をする」、「主の晩餐」、「ペトロの離反を予告する」、「ゲツセマネで祈る」、「裏切られ、逮捕される」、「一人の

若者、逃げる」、「最高法院で裁判を受ける」、そして最後は「ペトロ、イエスを知らないと言う」となっています。

ここで登場する人物たちは、ただ二人を除いて皆、浮き足立っているように思えます。策略する祭司長たち、ユダ、ペトロ、また眠りこけてしまう弟子たち、闇に乗じてイエス様を捕えようと剣や棒を持ってやってきた一団、最高法院でイエス様を裁こうとする権力者たち。イエス様を平手で打つ下役たち…。しかし、二人を除いてというのは、ナルドの香油を捧げた女性と、イエス様ご自身です。この二人は、突き抜けた眼差しを持っているように思います。

まるで、ナルドの香油を頭に注がれたイエス様は、この時から、正に「油注がれた人——すなわちメシア」としての使命に心が定められ、十字架で死なれることによって私たち罪ある人間たちを救う、その神様のご計画を受け止める最終的な、決定的な覚悟を持たれたのではないのでしょうか。

わたしはそのハイライトがこの14章の真ん中にある、ゲツセマネの祈りであると思います。36節の祈りの言葉はこうです。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

主は、何度も祈られる中で、自分の思いではなく、神様のご計画を選び取られました。それは、ご自分が神様から捨てられるという絶望の死を自らに引き受ける、ということです。汗が血のしたたりのように顔から落ちる壮絶な祈り、戦いの祈りです。

そして、それは愛の祈りでもありました。このゲツセマネの祈りの前にはペトロの離反の予告が語られ、そしてこの祈りの直後に、主イエスはユダの接吻をもって遂に捕えられるのです。ペトロとユダの不信仰と裏切り、その二つの間にこのゲツセマネの祈りが祈られています。イエス様は、愛する弟子が自分の愛のうちから外れていくこと、それが何よりも悲しかったのだと思います。主は「私は死ぬばかりに悲しい」と仰しゃり、本当にペトロの罪を悲しみ、またユダの罪を悲しみ、しかし断罪することはせず、苦しみながらも、全き赦しの道、すなわち十字架の救いが成し遂げられるように、神様に徹底的に祈り抜かれたのではないのでしょうか！

私たちは知っています。主が十字架の上で祈られた言葉を。「父よ、彼らをお許し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)。その時にご自分を十字架にかけた人々に向かってだけではありません。「自分が何をしているのか知らない」私たち一人ひとりに向けられた執成しの祈りです。ユダもペトロも、この祈りの中にいるのです。

[結]イエスとユダの交わり

この間の祈り会で山下先生から「ペトロとは、帰ってきたユダだ」と教えられ、本当にそうだと思いました。ペトロはイエス様の言葉を思い起して激しく涙を流しましたが、再び弟子たちの交わりの中に帰ってきました。神様の全き赦しを自分に受けたのです。では、絶望の中に死んで行ってしまったユダはどうなのでしょう？永遠の刑罰を受けるのでしょうか？

再び、ボンヘッファーの言葉を紹介したいと思います。これは驚くべき言葉です。

「イエスはユダをどれほど愛していることか。イエスはこの期に及んでもなおユダを「友よ」(マタイ26:50)と呼んでいる。イエスはなおもユダを離そうとしない。イエスはユダの接吻を受ける。ユダとイエスの交わり

りは今や最後まで行きつかなければならないのである。…結末を見ることにしよう。イエス・キリストがゴルゴタの十字架の上で人間の救いのために苦しんだ正にその時に、ユダは出てゆき、首をくくって死んだ。(マタイ27:5) 何という連帯が、ここにあるであろうか!」。

ボンヘッフアーは「あわれなユダ、お前は何ということをしてしまったのか」という讚美歌の一節を引用し、「それ以上には何も言わないことにしよう」と痛みつつ語りながらも、「われわれすべての人間の罪のために十字架につけられ、われわれのために救いの業を完成してくれた方に、助けを求めようではないか」とユダに関する説教を結んでいます。

私は信じます。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。 (マルコ 15:34)この祈りは、神に捨てられた者の、代弁の祈りではないでしょうか。主イエスは神の御子でありながら、神様に捨てられる絶望を経験されたのです。この祈りはユダの祈りでもあったのではないのでしょうか。イエス様が、決して自分で自分を救えない罪人のために死んで下さったこと、このことは、そのご生涯を通して戦い抜き、開いて下さった救いの事実です。

さあ、いよいよ、来週から受難週です。そして4月1日にはイースターを迎えます。私たちの中の暗い闇を打ち破って下さった主の出来事に、また御言葉を通して与かってゆきましょう。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、ユダの裏切りの物語、私たちは、なかなか これを受け止め切れません。しかし、あなたが聖書を通して語って下さっていることは、滅びや断罪ではなく、救いです。赦しです。それを大胆に信じさせてください。どうか自らの闇に打ち負かされることがないように、既にゲツセマネと十字架のイエス様が、そのご生涯全体を賭けて祈って下さったその祈りの真只中に、私たちが赦され、受け入れられていることを深く信じさせてください。今、絶望している人にあなたの光を届かせて下さい。世界中の教会を強め、あなたの器として豊かにお用い下さい。救い主イエス様のお名前によってお祈り致します。アーメン。